

身代わりの地味な本好きの文官は、
皇帝陛下の執拗な連続絶頂愛撫に抗えない。

プロローグ

第一章 無口な皇帝と初対峙

第二章 密室の熱い抱擁

第三章 終わらぬ絶頂地獄

エピローグ

第三章 終わらぬ絶頂地獄

唇が重なった瞬間、私の中の何かが弾けて吹き飛んだ。

「んんっ……！？ う、あ……っ！」

重ねられたヴァールハイト様のその唇は、驚くほど熱くて、そしてどこまでも貪欲だった。固く閉じられていた私の口を、彼の巧みな舌先が、強引に押し開いて容赦なく侵入してくる。お酒と甘い果実の香りが混ざり合った、彼の熱い熱い吐息が、口内いっぱい流れ込んでくる。

本とインクの匂いしか知らなかった私の閉ざされた口を、男の熱い舌が無慈悲にかき乱し、吸い上げ、上顎をなぞり、絡め取っていく。

「ふ、む……あ、んっ！は、あ……っ！」

唾液の溢れる水音が、静寂な寝室に淫らに響き渡る。

キスだけで頭の奥が真っ白になり、足先から力が抜ける。それでも必死に逃げようと、彼の分厚い軍服の胸を押す手も、ただ擦り寄るような弱々しい動きにしかならなかった。

そしてヴァールハイト様は、私を抱きしめる力を緩めず、口付けをしたまま、手を私の背中から肩へと滑らせていく。

バリッ！

突然、静寂を切り裂くような鋭い破裂音が響いた。

私の身体を縛り付けていた、あの豪華な深紅のドレスが、強靱な腕力によつて、胸元から一気に引き裂かれたのだ。

「ひあつ……！？　な、……っ！」

「布など邪魔だ」

立て続けに二度、三度と、布地が切り裂かれる音が響く。最高級の絹とレースで作られたドレスは、放り投げられて、さらに下着も剥ぎ取られ、冷たい夜気に私の素肌が晒された。

眼鏡もなく、ぼやけた視界の中、自分のあられない姿が、皇帝の視線に晒されていることだけが痛いほど伝わってくる。日光を知らない、病人かと思われるほど白磁のような素肌。文官としての質素な生活で育まれてきた、華奢で細い身体。胸元には、一度も触れられたことのない小さい二つの蕾が、恐怖と恥じらいでピンと尖っていた。

「ほう……これほどまでに真っ白で、無垢な身体なのか」

掠れた吐息が、剥き出しの私の胸元に直接吹きかけられる。

「ああ……っ！ こんな貧弱な体を、見ないでくださいっ！ 陛下のお目汚しになってしまいます。」

「余には……降り積もった初雪のように美しく見えるぞ」

そう言うや否や、私の左胸へとその大きな顔を埋めた。

「ひあつ——！？」

熱い唇と舌が、尖った乳首をダイレクトに吸い上げる。

ジュプツ、と音を立てて強く吸い絞られる強烈な快感に、私の背筋を激しい電撃が駆け抜けた。

「あつ、ダメ……っ！　そこ、吸わないで……ああつ！」

「ダメではない。お前は、快楽に震えていれば良いのだ」

まるで甘いお仕置きのように、歯を立てて甘噛みされたり、

舌先で転がされ、びゅうびゅうと強く引き伸ばされる。

「ふあああああ」

左乳首を責め立てながら、掌が右胸を丸ごと包み込んだ。大きな手が、私の胸を押し潰すように執拗に捏ね繰り回し、指先で頂点をコリコリと潰すように弄び始める。

「ああ！　あ！」

ペンしか握ったことのない文官だった、私の過敏な身体は、指先と唇がもたらす未知の快楽にあまりにも無防備すぎた。胸を交互に吸われ、弄ばれるだけで、キンキン甘く疼き、自分でも信じられないほど、汗が溢れ出していくのが分かる。

「はあっ、ああっ……！ ヴァールハイト様、助けて……っ！」

「助けを呼ぶ相手が違うな。狂わせているのは余なのだから」

ヴァールハイト様は、胸元からゆっくりと顔を上げると、濡れた唇で私の首筋、鎖骨、お腹へ、じっとり下っていった。彼の舌が通るたびに、素肌が熱を帯びていく。

ぞくぞくぞく！

「んんあ」

彼の手が、私の細くて白い太もを、優しく撫で上げて、拒む隙を与えずに膝を割らせる。私の最も恥ずかしい割目が、完全に無防備な状態で彼の目の前に開かれた。

「あ！？ いや、そこは……そこだけはダメえ……っ！」

「口では拒みながら、下はこれほど蜜を溢れさせているぞ」

ヴアールハイト様の掌が、私の溢れ出た蜜で濡れはじめたおまんこへとピタリと押し当てられた。

ぐちゃり、と濡れた肉皮が擦れ合う淫らな音が部屋に響く。彼の長くて太い指先が、愛液に濡れた密裂を優しく割ると、おまんこの一番先端にある固く尖った突起、愛液に浸ったクリトリスを、親指でジワジワと押し潰すように捏ね回した。

「ひやあああっ——！！？！？！？」

猛烈な快感が、全身の神経を駆け巡った。背中が海老反りに跳ね上がり、シーツをちぎれんばかりに掴みしめる。

「あつ、あああつ！そこ変！なにこれ、なにこれえっ！？おかしくなる……っ！」

「おかしくなれ。お前の全てを余に委ねろ」

クリトリスを指先で弾き、円を描くように執拗に責める。それだけにとどまらず、蜜でドロドロになった秘裂の隙間へ、彼の中指がスルリと割り込んできた。

じゅぶぷうう。

「ひっ……！？は、入ってくる……指があつ！」

「お前の中がどうなっているか、検分させてもらおう」

第一関節、第二関節と、指が膣内へ押し込まれていく。

「んっふ」

肉壁が押し広げられる感覚に、私は声もなく喘いだ。

「お前の中は、とても熱くてやわらかい」

「うう」

さらに指は奥へと進み、膣内の上側にある、特に過敏なところをカリカリ擦り上げた。

「ああああっ！？そこっ、そこダメええっ！」

「ほう……ここが好きなのか。お前の可憐なヒダが、余の指に必死に吸い付いてくるぞ」

指を一本から二本へと増やされ、お腹の底を抉るような激しいストロークが始まる。同時に、もう一方の指でクリトリスをこれでもかと強く揉まれた。

「んあああ！」

くりくりくりくりくりゆ。
じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶ！